

事業名：那須良輔作品及び関連資料群アーカイブ化事業
団体名：湯前町

【湯前町】

湯前町は熊本県南部の宮崎県境に位置し、平野部は球磨盆地（人吉盆地）の東端、山間部は九州山地の一角を占めている。東西方向 8.5km、南北方向 10km、総面積は 48.37 km²で、その7割強が林野となっている。急峻な山地に囲まれた球磨地域は、盆地特有の地形と気候で外敵を阻みつつ、独自の文化を形成し、城泉寺（浄心寺）の「木造阿弥陀如来及び両侍像」に代表される鎌倉時代からの仏教文化が数多く残っており、明治時代まで約 700 年間続いた相良氏の統治と深く関係しているといわれ、そのストーリーは平成 27 年度（2016）に「相良 700 年が生んだ保守と進取の文化」として日本遺産に認定されている。

令和 3 年（2021）末時点の人口は 3,703 人で昭和 30 年代のピーク人口 9 千人弱から過疎・少子高齢化等により人口規模は半減以上となっている。



【湯前まんが美術館】

湯前まんが美術館は、町出身の那須良輔氏の遺族から多数の作品寄贈を受けたことを契機とし、那須良輔作品を保存・展示するとともに「まちづくりの核となり町民文化の発展に寄与する施設」として平成 4 年（1992）に開館、建物は「くまもとアートポリス」参加作品で、球磨地方の杉檜を使用し、伝統的な大工技術を駆使した木造建築である。霊峰市房山のふもとに群れる魚の群れをイメージし、5 棟に分かれた建物は球磨地方の郷土玩具きじ馬を想起させる。

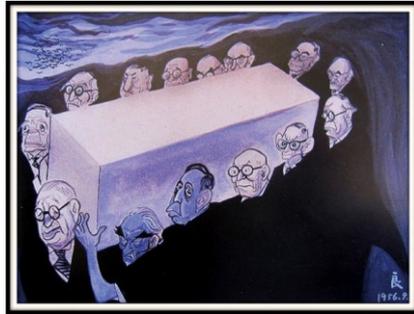
自然に親しみ深く愛した那須良輔の作品を鑑賞するに相応しく、自然に囲まれゆったりとした時間の中で、大胆に進化し続けるマンガというモダンアートを楽しめる美術館となっており開館から 30 年が経過している。



きじ馬

【漫画家那須良輔】

那須良輔は昭和の時代に活躍した漫画家で、生涯で数万点に及ぶ作品を残している。特に、鋭い観察力を活かした痛烈な風刺で政界漫画（本人言）の世界で確固たる地位を築いた。最も多く残された作品は政治風刺漫画であるが、漫画以外にもやわらかいタッチの風景画や静物画も残している。後半生は鎌倉に居を構え、数多くの評論家や文人達と交流しながら随筆も執筆するなど自然を愛する文化人としても評価されている。



大正 2 年 (1913)	4 月 15 日湯前村染田に父源次郎、母ヨシの長男として誕生
昭和 2 年 (1927)	湯前高等小学校卒業、在学中「全国小学校図画作品展」で二年連続二等 この頃より、少年雑誌に漫画や短歌を投稿する。
昭和 7 年 (1932)	洋画家を志し、親戚中の反対を押し切って単身上京、太平洋美術学校予科に入学。生活費稼ぎに漫画を雑誌に投稿するようになる
昭和 8 年 (1933)	「日本少年」（実業之日本社）に原稿が採用され専属に。 「呑気な殿様」・「吾輩はノミである」等で売れっ子漫画家となる。
昭和 12 年 (1937)	第 1 回目の召集を受け、終戦まで 3 回の召集、大本営参謀本部等で伝単やポスター制作に従事
昭和 20 年 (1945)	近藤日出造、横山隆一等と共に仕事を続けるが、この年の 3 月に漫画集団事務所が空襲で焼失、熊本へ帰郷
昭和 21 年 (1946)	熊本日日新聞に子ども向け漫画を連載
昭和 23 年 (1948)	上京、平河町に居をかまえる。その後、鎌倉市扇ヶ谷・小林秀雄の旧居に転居
昭和 24 年 (1949)	横山氏の推薦で毎日新聞社嘱託として政治漫画、随筆を担当
昭和 27 年 (1952)	東洋経済新報社嘱託、「週刊東洋経済」に政治漫画・随筆を連載
昭和 31 年 (1956)	第 3 次文化使節団として、草野心平、壇一雄等と中国を訪問
昭和 34 年 (1959)	初めての本格的な著書「吉田から岸へ」を刊行。初の銅版画展開催
昭和 54 年 (1979)	著書「随筆私の絵暦」「鎌倉を描く」「筆かげん味かげん」「鎌倉・谷の細道、屋根の小径」「わが酒中交遊記」を刊行
昭和 60 年 (1985)	「漫画家生活 50 年」と題した個展を鎌倉、熊本で開催
昭和 62 年 (1987)	日本漫画家協会選考委員特別賞受賞
昭和 63 年 (1988)	勲四等瑞宝章受賞
平成元年 (1989)	2 月 22 日自宅にて逝去（享年 75 歳。2 月 24 日、漫画集団葬が営まれる。法号「自然院清諷良輔居士」
平成 4 年 (1992)	湯前まんが美術館（那須良輔記念館）開館、「第 1 回那須良輔風刺漫画大賞」開催される。熊本県近代文化功労賞顕彰
平成 25 年 (2013)	湯前町町民栄誉賞

【アーカイブ化事業】

湯前まんが美術館には、那須良輔のデビューから晩年に至るまでの作品及び関連資料およそ7千点が収蔵されると言われていたが、その正確な総数や内容は把握されていなかった。開館以来収蔵資料の調査が進められ、『館蔵品図録Ⅰ 那須良輔の世界』『那須良輔作品（毎日新聞）』『那須良輔作品（東洋経済）』といった資料集制作がなされており、紙媒体の台帳も作成されているが、電子化の遅れや目録化されていなかったため、検索性の低さや重複や抜けがあるなど収蔵品台帳として機能的な課題もあった。

この課題解決のために、令和2年度（2020）より文化庁所管の文化芸術振興補助金（メディア芸術アーカイブ推進支援事業）を活用しながらアーカイブ化事業の取り組みを進めている。事業初年度は、新型コロナウイルスの猛威が影響し、美術館としては休館を余儀なくされていたが、収蔵品の総点検には好機会となった。収蔵庫をはじめ館全体の総整理を行い収蔵品の総数と内訳が把握されたが、資料の質的課題もあり引き続きの詳細調査が必要な状況にあるといえる。事業においては小中学生の見学会や収蔵品管理作業体験、アーカイブ作業状況・成果の公開・展示といった地域住民等の学習機会創出や理解を深める活動を併せて実施している。また、アーカイブ化事業に取り組むことにより他館等との連携が進むとともに、外部有識者の指導助言等を得ながら、収蔵方針の制定や資料保存の技術的改善等も得られている。



那須良輔作品において、風刺漫画を中心とする作品の性質上、時代の流れに大きく影響され解説なしではその意味が理解されなくなる可能性もあり、早期に描かれた背景を調査しておく必要がある。また、当美術館は那須良輔と親交のあった漫画家や文化人とのつながりもあるが、彼らから那須の人物像や逸話を聞き取ることも時期的制約が懸念されている。



令和3年度（2021）ではアーカイブ化事業の対象資料を原画約7200点、書誌約4000点、作品関連資料約1000点とし、学芸員1名と会計年度任用職員2名の3名体制でアーカイブ化を進めている。風刺漫画においては時代背景調査なども含め、資料のデータベース化、原画等の電子画像化を行い、現物の保存処理や収蔵・調査においては、専門家の助言を得ながら引き続き改善を図っていく。また、アーカイブ化の成果を今後の活用等につ

なげるための検討を併せて進めていくこととしている。

本年度の成果目標は、資料目録作成とデジタル画像化を重点項目とし事業に取り組んでおり、原画を中心として資料目録とデジタル画像をセットにしたデータベースをクラウド型収蔵品管理システムに格納し公開を進めていくことを予定している。また、成果活用に向けて風刺漫画の出版や制作時期の把握を行い、学校授業等へ提供できるようなパッケージ作成を目指している。更に、関連事業として那須良輔の生涯を描いた『那須良輔偉人漫画』の制作を進めており、アーカイブ化と併せ複合的な事業展開を図っている。



本事業の社会的効果としては、整理・調査を経て、時代背景が明らかとなった作品は、歴史的資料として役立つことも可能となり、学校授業等でも地域の偉人が関わる社会や美術の教材として活用などを想定している。文化的効果としては、昭和史研究を深めることができることとなり、那須良輔を始め、彼をとりまく文化人や漫画家、作家などの横顔も館蔵資料として伝えることができることとなり、那須良輔の業績を色あせさせることなく、現代そして未来へ繋げること図っていく。また、経済的効果として、収蔵品の質的向上と併せ展示等の充実により美術館集客力の向上を図ると共に、原画のアニメーション化や地域事業者等へ一部デジタルコンテンツを提供してパッケージやPR資材等としての利活用を図り、町全体で取り組みを進めている“まんがのまちづくり”を一層進化させることを期待している。